

研究課題：病縁論の提唱と検証：患者会を軸にした紐帯の比較研究

2014 年 4 月 25 日

濱 雄亮（はま ゆうすけ）¹

1. 本研究について

- 本研究においては、大きく3つの取り組みと成果を得ることができた。
- 発表者の専攻は文化人類学で、非常勤講師として教育と研究を行う。
- 本研究全体の目的：「病縁（びょうえん）」概念の精緻化・有効性の検討。「病縁」とは、「病いを軸にして発生する人間関係」を指す発表者の造語。

2. 【研究 1：病縁論の精緻化】

- 研究の出発点
 - 苦悩への共同的対処と2つの「差異」への理解を深化させること。
 - フィールド：日に数回の自己注射が必要な1型糖尿病をもつ人々の患者会。
- 成果
 - 「大きな差異」
 - ◇ 糖尿病の有無が日常生活世界の住人との間にあるため、会では互いの経験や振る舞いを参照。
 - ◇ ポジティブに表出することもある。
 - 「小さな差異」
 - ◇ 対処法についての差異が存在。キャンプではこれが顕在化。
 - ◇ 互いの経験や振る舞いに興味を持ち続け付き合い続けることが可能。
 - ◇ このような場で醸成された仲間意識（病縁）があるからこそ、「大きな差異」に満ちた日常生活世界に戻ってからも、「大きな差異」を慈しむように扱うことが可能になる。
 - 病いを得るということは、その病いをもたない大多数の人との「差異」をもつことでもある。「差異」には、糖尿病を共有していない日常生活世界における周囲の人との間に現れる「大きな差異」と、糖尿病を共有する患者会のイベントにおける仲間との間に現れる「小さな差異」がある。

3. 【研究 2：患者会研究の豊饒化：企業との関係】

- 問題意識
 - 患者会研究における企業の関与の実情と背景については先行研究に置いては触れられて来なかった。
 - しかし、企業が提供する新薬・機器は、病いの経験に大きな影響を与えうる（「いかにも」な注射器からファッションブルな注射器に変わることで人前での注射がしやすくなる）。

¹ 慶應義塾大学文学部ほか 非常勤講師。<yusukehama@a6.keio.jp>

- 成果

- 企業と患者会の距離を短縮の要因

- ◇ [企業側] ニーズの把握によってより売れる商品を作れること。



図 1：旧来の注射器



図 2：新型注射器

- ◇ [企業側] 企業間の競争で優位に立てること。
- ◇ [企業側] 「患者中心の医療」という潮流が存在すること。
- ◇ [患者会側] 企業に直接要望を伝えられること。
- ◇ [患者会側] 資金提供を期待できること。
- ある営業担当者が挙げる患者会（サマーキャンプ）への関与の意義
 - ◇ 実際のユーザーが自社製品を使っている姿を目の当たりにできて新鮮であり、その姿を見ることで責任感が高まったということ。
 - ◇ 以前から顔を合わせていた医師とも寝食を共にすることで信頼関係が深まったということ。

- 課題

- 他のパターンの探究（インタビュー相手が若い女性であったため年長の男性にも話を聴くなど）

4. 【研究 3：文化人類学教育論の批判的検討と拡充】

- 問題意識

- 医療人類学は医療の批判を行うことが多かったが、医療が変わってほしいのであれば教育という方法がありうる。
- 文化人類学は、これまで専門外の人への発信方法を成熟させてこなかった。その成熟として、文献研究と高校生に対する自身の授業を検討。

- 先行研究の概観

- ①教育方針やカリキュラムの「提言」・②教科書等の「問題点の指摘と訂正案の提案」・③自らの授業の「実践報告」。
- 問題：「実践報告」が少ない・「問題点の指摘と訂正案の提案」と「提言」相互の連携は未確立。

- 発表者の授業実践とその成果

- 5-7 回の 50 分授業を慶應の一貫校の高校 1 年生に。
- 儀礼論・文化の定義と身体論を 2 回、空間論・境界論を 1 回ずつ。
- 知識習得や枠組みの応用は一定程度達成できている。
- 医療系大学にて医療人類学の講義を行った際と同様の傾向。

- 今後の方向性

- 文化人類学会における「医療人類学教育の検討」プロジェクトに参加中。他の研究者と連携してこの成果を共有・発展させる。